

往古は大陸交通の要路であり、降つて松浦黨の所領であつたところのこの地も、炭坑の開発と共に著しい變化をなした。松浦黨の居城として岸岳城頭に人馬の嘶いてゐたことも一時の夢と化し今は血涙空しく廢墟の趾を止むるのみであつて、城壁の文化は原野に移つた。枯芒淋しく生ひ茂つた荒野は炭坑の開発以來、鐵道の響や

轟々たる機械の噪音によつて靜寂を破られ、林立する大煙突からは濛々たる黒煙を吐き出し、處々にボタの山が築かれるに至つた。かくして自然は全く文明の力の下に暴殄されて了つた。一片の松石を拾ひ遠い地質時代から現在に至るこの地方の變遷の跡を追懷して筆を擱く(原口)

伊太利とところぐ (十)

瀧川 規 一

【ナポリ行】 法王に謁を賜はるには相當の手續さと相當の時間とを要する。友人は羅馬に足を踏み入れバチカン宮殿の敷居を跨げた以上法王の御手に吻を接しその溫容の光澤に浴するが當然ではないかとすゝめて呉れた。それにも拘らず生來の引込み思案が擡頭してその恩澤に浴する氣になれない。支倉常長が遙々生命を賭してやつたことを今容易くなし得る事情に居りな

がらそれをなす氣になれない。のみならず引込み思案が勝手な理窟を云ひ出した。それは平和なる精靈の保護宮を護る長槍嚴しき軍隊を見た時である。奈良の大佛を警護する南大門の仁王さんが形相いかめしい様子をしてゐることを想へば何んでもないことであるが、バチカン宮を警護する軍人を見て、平和主義の法王との不調和を想つた。のみならず法王の散歩される時間

なりとて人拂ひを喰つた。當然であり過ぎる程當然なることまでも神經過敏の因をなした。そんなこんなことが雑然と集つて法王に謁を賜はる機會を失した。

羅馬見物を只赤壁の詩人キイツの假寓とコロシムとに止め歸路悠々探求することにしてナポリに走つた。車内でポーランド飛行將校なりと自稱する男と伊人と共に大に外遊客歡待論をやつてゐるといつの程かナポリに着いた。

ナポリ行を思ふ時自ら想ひ出すのは二百八十五年前に二十四歳の青年 John Evelyn がナポリ見物に行つた時の簡單なる旅行記である。英文學を志す人々には知り過ぎる程知られてゐる十七世紀の日記作者ジョン・エヴリその人である。彼の行文簡潔明截であるが十七世紀のナポリと今日のナポリとの差異を知り得て興がある彼が十七皿若くは二十皿の御馳走を安價に平げてナポリは天下に類なきよい都會なりと云ひヴェスヴィアス山に一部は驢馬で登り一部は徒歩で或は辿り溶岩の爲めに足を傷け噴火口の口際

に這寄つてその爆音を聞き分けんとしてゐるなど實に他愛もないことを書いて居る。今日では溶岩は化學實驗用の試験管の小さきものに五種ばかり入れて販賣してゐる。科學の發達せざる昔のこととて是非もないことではあるが、エヴリンにはそれが非常に珍らしく思はれたらしい。少し後れて一七一七年に登山してゐる Dr. Arbuthnot が火山の爆音を説明してゐる。最初は咳きの聲であり次は獻猷の聲であり次は嘆聲となり更に泡立つ響となり遂に突出の爆音となるその後は或は怒濤の轟音ともなり雷鳴の轟きともなり或は屋根から一時に多くの瓦を往來に投げたやうな音ともなり大砲の響ともなると云つてゐる。更に逆つて噴火史を繙くと記元後七九年には Pliny が云ふ好事家が居つた。噴火口の内部の様子を知りたくて耐らない。

彼は博學を以て當時聞えて居り、有名なる史家 Tacitus にまでその名が知られてゐた。何事にも鑿案好きであつた。賞めて云へば科學者たる要素をもつてゐた。火口の様子は彼にとつて

自然の最大好奇物であつた。何故に地底から煙が出て火を吐くか不思議で耐らなかつた。彼は火口に餘りに大膽に近付いた。時恰も爆發があつた。人々はクシオンをハンカチで頭にくゝりつけて逃げ去つた。然るにプリニは海岸で何等の負傷もせず眠れるが如く屍體を横へてゐた。

火山國に生を享けた邦人はプリニ程の好奇心をもたない。また今日の科學が吾々をして火山に對して特別の好奇心をもたしめなくなつてゐる。ナポリに入つて忘る可からざるものは、詩人 Virgil の墓である。墓は Posilipo 山上の圓形墳墓である。入口に刻され不明瞭ながら讀み得る有名な記銘がある。

Stanis Cencovius

1589

Qui cineres ? Tumuli haec vestigia, conditur
oim Ille hoc qui cecinit Pascua, Rura,
Duces.

Can. Ree. MDLIII

ヴァージルは Posilipo に別邸を持ち、其處

で有名な *Georgics* と *Aeneid* とを書いたのである。彼は紀元前一九九年に希臘から歸途 Brundisium で死しナポリに葬られた。Silus Italicus と云ふ男は詩人の墳墓を買ひ之を修築し恰も禮拜堂でもあるかの如く屢墓參した。傳説によると或る英國の學者はヴァージルの骸骨を欲しいと云つて來たが、その墳墓の地が分明しない。漸くにして山地の奥底に割り入ると詩人の屍體は生けるが如く著書を枕にして眠つて居た。英人はその書籍をもち去り屍體を他に葬つたと云ふ。傳説は更に變化して、偉大なる魔法師ヴァージルは鷄卵の上に Castel Uovo の城を築いたとさへ云つてゐる。兎に角現在の位置がヴァージルの墓として間違ひがないやうである。傳説は傳説を産んで面白う。墓前の月桂樹は詩人ダンテの死と同時に枯死したが、Petrarch がヴァージルの墓を訪れて他の月桂樹を植えた。どこでもよくあることだが、名所舊蹟を訪れる人々が何か記念品をもち歸りたがる。それが爲めに十九世紀の初期まで繁茂してゐた月桂樹は旅

行客の爲に遂に枯らされて了つたさうである。Boccaccio が商賣をやめて詩神の爲めに一生を捧げると誓つたのはこの墓前である。今日ある月桂樹は誰か後人が植えたものらしい。詩人の墓前に額きて何を誓ふ可きか。想へば慚愧の至である。

豫ねて聞いてゐた日本人専門のもさひきの居るホテルに一泊する。モサヒキの名をアントニオと云ふ。誰彼となしに彼の所持する手帳に何かしら書いてゐる。そのうちでも目を惹いたのは下居春吉氏の書いたものである。

『ナポリ在住十年餘、一昨年の幕歸國の時までアントニオは私にとつては骨肉の親よりもなつかしい縁があります。今三度目にナポリを立つて日本に向ふの日、心からわが恩人アントニオ老の健在を祈り今秋また共に語るの日を樂しみにして待つて居ます。大正十五年三月二十二日加茂丸出航の日、下居春吉』とある。さうかと思へば六つかしい漢文字を並べた人もある。五十功名徹客身、平常講學不忘奥、百年生理歸

何處、萬里還成負笈人てな譯の判らぬことを書列ねてゐる。『この人にはどなたも御安神なすつて萬事おまかせしてよろしい』とか『ネアペルを薄しと見しは人心、眞心餘るアントニオの君』とか『ナポリを見ずして何人も死ぬな、アントニオなくしてナポリを何人も見ず』とか種々なことが日本人によつて書かれてある。大阪の知人がナポリで金をとられて文なしになつたその時羅馬まで歸る汽車賃をとりかへて呉れた由を書いてゐる。兎に角ナポリに行く人は彼の案内に満足してゐることだけは事實である。胸間に行さき日の丸の旗をつけ白髪の溫容に微笑を浮べて邦人の世話をする。幼にして両親に別れ老いて愛妻を失ひ語るに實子なしと云ふ。事の眞偽は知らないが、邦人の氣質を理解し巧に世話をやいて呉れる。それが彼の取柄である。彼は自ら稱して日本人専門の案内者なりと云ふ彼の帳面に署名してゐる人丈けでも随分澤山人數である。

最初はアントニオの厄介になるまいと思つた

晝間市中を歩くに何の故障があるかと思つたので獨りあちらこちらと散歩する。町角でシー！／＼と云つて靴をつかむ奴がある。靴磨きを強制せんとする男である。城の前を横切らんとすればタキシ臺からジャボと高らかに呼ぶ奴がある。タキシ乗車の強制である。とある門口でシー！と呼ぶ中年の男はタバコを強要する。行き過ぎんとした三人の青年は道を遮つて顔を三方から覗いてジャボを連呼する。時には三人の男が靴を奪ひ合つて磨かんとする。時には行がかりの老婆が片手を指伸ばして金を懇請する。數人の小供が繪はがきを買へと強がむ。辭はればジャボを連呼する。ナポリ市の獨り歩きは氣の弱い者には出来ない。ナポリを見ぬ者は死す能はずと諺に云ふが、ナポリのこの様子を見れば死ぬやうな氣がする。

地中海の水は實に碧い。夕陽半山に没し浮雲は一部分猶輝いてゐる。詩人キイツが船から身を沈めたと云ふ處はいづくかと空想を走らす。詩の夢を馳せつゝ海岸を徘徊する。異郷の波と

空は坐ろに孤獨の感を與へる。物淋しさのうちにもキイツの詩を口吟しながら數歩運んでは波の色を見、數歩進んでは空を眺めてゐると、詩の心境忽にして消え去つた事が起つた。二人の美人が異國人の手をとつてジャボと連呼するのである。さうかと思ふと數人の青年が包圍して怒氣を含んで伊語で罵るのである。この時救つて呉れたがアントニオである。彼の手帳に誰かが書いた如く如實に安堵仁翁であつた。アントニオと青年等との口喧嘩が一渡り始まる。翁に連れられて宿に歸る。ナポリにはこんなのに出會すと危険だと教へられる。海岸の夕風を浴び月光の地中海を見たいと云つたが逆も危険だとして諫止される。他のホテル前に佇んでゐるとホテル員までがジャボと云ふ。自分の泊つてゐるホテルに歸るとホテル員は握手し、只ひとり外出はよしだがよいと教へて呉れる。

アントニオは死んだので俺がその代りをやつてゐると云ふ男が居た。その男は云ふ。チリラ出せば特別の處へ案内すると云つたが、うつか

り乗ると恐ろしくなり、ホテルに籠城する。

八時に宿を出てア翁の案内でボンベイ見物に出かける。オリヅの木、アカシアの木、オリアンダの木、ソルベの木など暇に委せて木調べをやる。ボンベイの發掘物は寧ろナポリの博物館に珍藏されてゐる。例の喧し物は博物館の秘藏である。處女に人世の要諦を教へる壁畫はボンベイにある。特別觀覽の秘物を特に覗ふ者は米婦人である。一人の婦人は熱心に見た後にO myの感歎辭を發する。一人は無言なること暫時の後、オ！尤も！と云ふ。他の若き婦人はナイス！と云ふ。ア翁の説明を聞いてゐた一人は千年の昔にもこんなことがあつたかと問ふ。ア翁早速と、若しなければ人類絶滅だと云ひ平然とすましてゐる。ア翁笑つて曰く、あんな秘物を見るのは男子よりも女子の方が好奇心に富むのだから面白いと云ふ。往年京外醍醐寺の秘藏である鳥羽僧正の秘畫を最も熱心に觀たのは女流畫家であつた。彼此想ひ合はして甚面白く思つた。ボンベイを研究せんとする者には非常な豫

備知識が要る。或者は紀元前の都市計畫を見んとするであらうし或者は水道の設備を研究せんとするであらう。或は浴場設備を見んとするであらうし、或者は劇場その他富家の家屋建築を研究するであらう。或者は壁畫その他庭園の設備を見るであらう。或はその昔の娼家に好寄心をそゝるであらう。老古歴史の眼をもつて種々の設備を見る時一日にして日足らざるを覺えるのである。

新著紹介

○郷土地理研究

小田内通敏著 刀江書院發行
定價二圓二十錢

本書は四六版三百二十五頁の手順な本である、題して郷土地理とあるが、内容は郷土としての村落と都市、郷土地理への學的根據、郷土地理研究項目の三綱目をかゝげ所謂郷土地理は一一八頁これに都市地理の研究といふ數十頁が添加されてゐる、故に中程からさきは、これは都市地理學の本かとも考へさせる。勿論都市も郷土の一つであるから差岡へはしない、けれども著者の見解によるとさきの郷土地理といふのは郷土の單位は一軒家であつて、それから村となり山の村、野